

# 大正琴を起源としたバリの楽器プンティンの「伝統化」とその大正琴へ回帰の兆し

## Traditionalization of the penting, an instrument originating from the Taisho-goto: Signs of a return to the instrument's origins

梅田 英春

文化政策学部 芸術文化学科

UMEDA Hideharu

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本論文では、バリ島東部カラングッサム県アムラブラ周辺で演奏されている日本の大正琴を起源とするプンティン *penting* とよばれる楽器と、2007年に設立されたプンティンのアンサンブルのグループ「ムルドゥ・コマラ Merdu Komala」の活動を研究対象としている。そしてこのグループの活動を通して、2つの点を明らかにした。一つは、この楽器やアンサンブルがカラングッサム県に独特な芸能であることが強調され、その後、歴史性が付与されていき、この芸能が「創られた伝統」となったことである。そしてもう一つは、バリの伝統音楽を演奏するために変容した楽器を使って、全音階の西洋音楽を演奏する試みが行われる中で、プンティンが、再び全音階を基本にしている日本の大正琴へと回帰しつつある現状についてである。

The subject of this paper is an instrument called *penting*, which originates from the Japanese *Taisho-goto*. It is played in the Amlapura region in Karangasem, East Bali, and the activities of the *penting* ensemble *Merdu Komala*, which was established in 2007. Two points are made evident in this paper. The first is that the instruments and the ensemble were emphasized as a performing art unique to the Karangasem district and were given a historical character, resulting in the 'traditionalization' of this performing Arts, hence becoming 'The invention of tradition.' Another point concerns the current situation where the *penting* is returning to the Japanese *Taisho-goto*, based on a diatonic scale, as attempts are made to use the *penting* to play Western music.

### 1. はじめに

本論ではバリ島東部カラングッサム県の県庁所在地アムラブラ周辺で演奏されている日本の大正琴を起源とするプンティン *penting* とよばれる楽器と、そのアンサンブルのグループ「ムルドゥ・コマラ Merdu Komala」の活動に焦点を当てる。そしてこのグループの活動を通して、その楽器や楽器を使ったアンサンブルが、カラングッサム県において今では「伝統楽器」や「古典的なガムラン」などとよばれるようになった経緯を明らかにするとともに、バリの伝統音楽を演奏するために変容した楽器が、西洋楽器の代用品として創作された日本の大正琴へと再び回帰しつつある現状について2022年に実施した現地調査に基づいて報告する<sup>1)</sup>。

### 2. プンティンの歴史と概観

これまでいくつかの拙著の中でアムラブラ周辺に伝播して変容していった楽器であるプンティンの歴史について述べてきたが、諸説さまざまであり、正確なところは明らかではない。ただ演奏者の語りに共通していることは、この楽器が外来の楽器であり、それがカラングッサム県で変容して現在のプンティンになったという認識である。

プンティンの起源が大正琴であることはその楽器の形態から明らかであるが、楽器の由来についての記述は、数少ないインドネシア語の文献の中に散見できる。アムラブラ在住の歴史研究家イ・コマン・パセック・アンタラ I Komang Pasek Antaraは、この楽器がジャワ島から伝わり、それがバリ島、ロンボック島へと東に伝播した説、さらには中国から伝播したという両説を記している (Antara 1987, Antara 2010:25)。

また2020年に公開された、インドネシア文化教育省文化総局 Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Kebudayaanの中のバリ文化保護センター Balai Pelestarian Nilai Budaya (BPNB) Baliによって制作されたドキュメンタリー映像「楽器プンティン Alat Musik Penting」の中で行なわれたインタビューで、演奏者のイ・ワヤン・スクルタ I Wayan Sekurtaは言い伝えられた話として、クルンクン<sup>2)</sup>からやって来たピチャPicaという行商人が、この楽器をカラングッサム県に持ち込んだと応えている<sup>3)</sup>。ただしその時期については述べていない。

時期に関しても諸説あるが、現在はオランダ植民地時代説 (1930年代説) が有力である。この時代の伝播説については、バリ島東部カラングッサムの王族の1人で、プンティンの演奏者・楽器製作者でもあるアナッ・アグン・グデ・クレスナ・ドゥイパヤナ Anak Agung Gede Kresna Dwipayana (以後、グン・クレスナと表記) のインタビューが情報源と考えられる。先にあげたアンタラの調査では、このグン・クレスナへのインタビューをもとにカラングッサムには1930年にはすでに楽器が存在したと述べている (Antara 2010:5)。著者もアンタラ氏と同様にクリシュナ氏にインタビューをしたが、彼は、1930年にカラングッサム王朝で実施されたオランダ女王陛下を讃える芸術イベント (ングラジャ・クニン ngraja kuning) の中で、アムラブラ周辺のムスリムの人々が、当時マンドリンとよばれたこの楽器を演奏したと述べている。なおアムラブラのムスリム集落においては、古い形態の大正琴が今なお演奏されることから、この説ではモスリムの人々が最初にカラングッサム州に大正琴を持ち込んだことを示唆している。

その後の発展についてはすでに別稿で論じているので本稿では記述しないが (梅田 2011:53-64)、個人の娯楽として楽しまれていたプンティンは1960年代には複数の

青銅製のガムランの拍節楽器を加えたアンサンブルとして演奏されるようになった（梅田 2016：61-2）。1970年代にはアムラブラ周辺で複数のグループがあり盛んに演奏された（梅田 2011：59）。

1993年には、新たな観光地として開発され、アムラブラにも近いチャンディダサCandidasaで観光用に上演された芸能チャカプンcakapungにプンティンが導入され、その後、90年代中頃にはゲンジェgenjekとよばれるバリ東部で誕生した新しい芸能の旋律楽器としてプンティンが加えられていく（梅田 2011：59-60）。しかしプンティンのアンサンブルは青銅製のガムラン・アンサンブルであるゴング・クビヤル gong kebyarの普及により徐々に衰退していき、1980年代には若い演奏者が中心になり、経験者を集めた新たなグループが複数結成された。しかし高齢な演奏者の死去などにより、これらのグループも演奏を休止してしまっ<sup>4</sup>。このように衰退したこのプンティン・アンサンブルの再興が行われたのは21世紀に入ってからのことである。

### 3. 初期の楽曲の変遷

先に紹介したインドネシアの文化教育省文化総局、バリ文化保護センター製作のドキュメンタリー映像の中で、演奏者のスクルタは次のように述べている。

クルンクンから伝わった楽器は、唱歌が演奏できるような音階[西洋音楽と同じ全音階]だった。しかしバリでは、そのまま使わずに改良して、ピトラ・ヤドニャpitra yadnyaで用いられる4音音階のガムラン・アンクルンの代わりに用いた<sup>5</sup>。

このことは、全音、半音も演奏できる12平均律に調律された西洋の音階の大正琴が、死者の魂を浄化する儀礼の中で用いられる4音音階を演奏するための楽器へと変容していったことを意味する。その後、アムラブラで製作され始めた楽器には、大正琴のように多くの鍵盤がつけられるのだが、それはほぼ装飾的なもので、そのうちの4音のみ、つまりスレンドロ4音音階だけを使用していた。その後、徐々にペログ音階も使用するようになるが、現在でもモスリム集落では4音音階の曲しか演奏されないことから、この地域では古い様式の楽曲が残っていると考えられる。

1960年代になるとバリ全土に青銅製のガムラン編成であるペログ5音音階のゴング・クビヤルの普及が始まるが、まだまだ高額な楽器であったことから現在のようにほとんどの集落が所有しているわけではなかった。そうした時代にゴング・クビヤルの代用として用いられたのがプンティンのアンサンブルだった。ここではじめてスレンドロ4音階以外の音階が用いられるようになった。しかしどちらも伝統音楽の音階であり、大正琴のように西洋音楽を演奏する発想は生まれなかった。その後プンティンは、スレンドロ音階、ペログ音階の両方を演奏できる楽器として発展していくのである。いいかえれば、四音スレンドロ音階を持つガムラン・アンクルンと五音ペログ音階を持つゴング・クビヤルの代用楽器のような役割を果たしていたといっても過言ではない。

### 4. ムルドゥ・コマラの結成

1990年代に入るとすっかり演奏されなくなったプンティンだが、一人の地方公務員であるイ・ワヤン・ウィダナ I Wayan Widana（1966-）の提案により、プンティンのアンサンブルの再興が始まる。復興の契機についてウィダナは次のように語っている。

2000年に地方分権が始まり、アジェグ・バリAjeg Baliというスローガン<sup>6</sup>が掲げられてから、カランガッサム県、特に私が住むアムラブラの誇れる文化は何かを考えてきた。そして、子どものときよく耳にしたプンティンの響きこそが、他の地域にはないアムラブラ独特の音楽文化であると確信してその復興にとりかかった。ただ、私はガムランの演奏ができないのでプロデューサーとなって、復興に協力してもらえ若いメンバーを集め、過去に演奏をしていた経験者に指導をしてもらうことから始めたのだった（Widana p.c. 2022年8月28日）。

まずウィダナは、1980年代に短期間復興したプンティンのグループの中心で活動していたイ・クトゥ・バワ I Ketut Bawa（1958-）を指導者として招いた。現在でも彼はムルドゥ・コマラの中心的指導者の一人であり、演奏者でもある。また長年、高校で音楽の教員をしていたことからメンバーの中では西洋音楽に精通していた。この彼の経験が後のグループの活動に大きな影響を与えることになる。またカランガッサムの王族の家系でプンティンの演奏者でもあったグン・クレスナは、国立ウダヤナ大学の美術学部出身であり、演奏の中心的存在としてだけではなく、楽器デザインの改良をも行うことになる。

こうしたウィダナの努力の結果、新しい世代のグループとして2007年9月にプンティンのグループ「ムルドゥ・コマラ」が結成され、活動が始まったのだった。

ウィダナはこのグループの目的として次の5点を挙げている（Antra 2010：25）。

- (1) 楽器の保護
- (2) 以前演奏されていた曲の復興
- (3) プンティンの芸術に関する歴史の発掘
- (4) 楽器の改良と、プンティンの豊かな音の最大限の表現
- (5) 地域の人々への認知を目的とした諸儀礼での演奏や地域の儀式やさまざまなイベントへの参加

先に挙げたバワとグン・クレスナは、演奏指導と同時に、グループのための新曲の創作、また楽器の改良に従事する。さらにウィダナはプロデューサーとしてメディアへの認知活動、さらにはバリではンガヤngayahとよばれる各地でのボランティアでの演奏を行う<sup>7</sup>。こうした活動が実り、現在はカランガッサム県を代表する演奏グループとしてバリ島芸術祭への出演（2009年、2010年はオープニングの行列、2017年は単独の舞台を行う）を果し、その後は、カランガッサム県の行政機関が主催する公的なイベントから、各地の諸儀礼での演奏までさまざまな舞台を行うグループへと成長した。

## 5. ムルドゥ・コマラの演奏楽曲の変遷

最初期のブンティンは、全音階の楽器であるにもかかわらず、バリのスレンドロ4音階の曲のみを演奏する楽器として機能していたことは前述したが、その後、スレンドロ以外のペロック音階を演奏する楽器へと変貌していく。ただその楽器は、アンサンブルで用いられる限り、あくまでもガムラン音楽と同様にバリの音階を演奏する楽器として機能しており、日本の大正琴のように洋楽器として全音階の曲を演奏するという発想は生まれていない。その証拠に、ウィダナはこの楽器を「5つの音楽」を意味する「パンチャ・ギータ Panca Gita」と言い換え、バリのヒンドゥー教の五つに分類される儀礼のすべてで演奏できる楽器であると述べているのである<sup>8</sup>。ただウィダナは楽器の汎用性について次の用にも述べている。

この楽器はとて多くの旋法を演奏できる特徴を持っていることから、ゴング・クビヤル、ガムラン・アングクルン gamelan angklung、ジョゲツ joged、サダル sadar、スロンディン selondingの曲を演奏することができる。それだけではなく、現在のポップミュージックや唱歌の演奏までできるのだ<sup>9</sup>。

このインタビューの最後の部分、つまりポップミュージックや唱歌が演奏できる、という表現が重要である。確かにこの楽器の全音部分のキーは、一オクターブを7等分しているために、全音階に近い音を演奏することは可能である。しかしその調律システムは、全音階を基準に作られているわけではない。

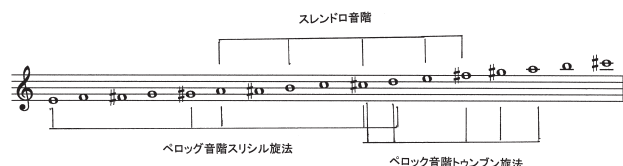
下記の写真1は、筆者が所有するムルドゥ・コマラが使用するブンティンの音階ボタンの配列である。左から右に低音から高音になる。このボタンは上段と下段に分けられているが、それを明確に図示したものが図1である。またこのボタンと音の関係を五線譜に採譜したものが楽譜1である。最も低いミは開放弦の音高である。なおブンティンの音律は西洋音楽の音律を使用しているわけではないため、便宜的に近い音で示している。それゆえ音程も半音が100セントではなく、大きい場合も小さい場合もある<sup>10</sup>。



写真1 バンティンの音階ボタンの配列

	高（音高） ←																		→ 低
上段	○			○	○			○		○									
下段		○	○	○	○		○		○	○	○	○		○		○			

図1 バンティンの音階ボタンの配列の図示



楽譜1 音階ボタンの音高と使用する音階と旋法

まずこのボタンの上段と下段は、洋楽器の代用として創作された日本の大正琴のようにピアノの白鍵と黒鍵の配置とは全く異なることがわかる。これはバリのガムラン音楽の諸音階を演奏することを重視して並べられた配置であり、西洋音楽の全音階がピアノの白鍵にあたる下段に配置されているわけではない。それゆえ、全音階で構成されているポップミュージックや唱歌を演奏することは容易ではないことがこの配置からもわかる。ただ全音階として唯一、右から5番目のラの音を主音とするイ長調の全音階を演奏することができるが、これまではこの音階で楽曲を演奏することはなかった。16の音階ボタンの音域を広く使うことから演奏の難易度も高く、さらにはグループとして全音階の楽曲を演奏する発想がなかったといえる。繰り返しになるが、この楽器はガムランの音楽の音階を演奏するために改良された楽器であって、西洋音楽の全音階を演奏することを念頭に改良された楽器ではないのである。

譜例1にバリの伝統的な音階として使用するボタンを示したが、代表的なものは楽譜に示した三つである。ピトラ・ヤドニャ pitra yadnyaとよばれる火葬儀礼など死者と関わる儀礼で用いるガムランの音階は、ガムラン・アングクルンがもつ4音スレンドロ音階であり、低い音からラ、シ、#ド、ミを用い、娯楽的舞踊であるジョゲツ jogedを伴奏するときには、4音スレンドロの高音に、#ファを加えて5音スレンドロとなる。

またペロック音階のうち、スリシルと呼ばれる旋法<sup>11</sup>を演奏する場合は、開放弦の低音のミ、#ソ、ラ、#ド、レの5つの五音階となる。またペロック音階のうちのトゥンブン tumbungとよばれる旋法は、#ト、レ、#ファ、#ソ、ラの五音階となる（このグループでは、トゥンブン旋法を、東部バリで伝承されてきた鉄製のガムランであるスロンディンの音階と呼んでいる）。それ以外にも西部バリで伝承されるジェゴグの4音階を用いることもある<sup>12</sup>。どちらにしても、こうした伝統的な音階を一つの楽器で使い分けられることがブンティンの大きな特徴であり、ムルドゥ・コマラは、招聘される儀礼によって、さまざまな音階の曲を使い分けられるようになったのである。

また2010年代に入ると、演奏者のグン・クレスナの作曲により、一曲の中で転音階、転旋法の構造を持つ作品が作曲されるようになった。

1曲の中での転旋法という概念は、7音音階を持つガムラン、スマル・ブグリンガン saih pitu semar peglisanの演奏の中で古くから行なわれる手法であるが、同じ楽器の中で行われる転音階という概念はこれまでのバリのガムランの中には存在しなかった。そもそも、ペロック音階とスレンドロ音階は全く音組織の構成が異なる音階であり、青銅製のガムランはどちらかの音階により作られているため、転音階をするためにはガムランのセットそのものを



えて演奏する必要があったからである。さらには、カランガッサム県のアムラブラ周辺で誕生した声の芸能ゲンジェック genjek を器楽曲の中に取り入れた作品が生まれるなど、ムルドゥ・コマラは伝統的なガムラン音楽の音階や旋法を用いることで新しい試みに挑戦し、それがカランガッサム県で評価されることになった<sup>13</sup>。

## 6. カランガッサム県における「創られた伝統」としてのブンティン

2007年に結成したムルドゥ・コマラの活動は、当初は一部地域のマイナーな楽器の復興として捉えられ、とりわけ注目されることはなかったが、その積極的な活動がメディアで紹介されるようになるとその評価に変化が現れる。結成3年後に先に紹介したアンタラによって書かれたムルドゥ・コマラの紹介記事は「カランガッサム県特有のガムラン・ブンティンの芸術——衰退寸前からの復興」と題され、その歴史や特徴について紹介した (Antara 2010: 25)。ここで注目すべきは、ブンティンがカランガッサム特有の楽器であり、演奏編成であることが強調された点である。

そもそもこの楽器は大正琴を起源としているが、大正琴は1912年(大正元年)に名古屋で発明された創作楽器である。第一次世界大戦(1914-18)の間、ドイツからのアジア向けの玩具の輸出が途絶えたことをきっかけに、日本がアジアに玩具の輸出を開始するがその中の一つが大正琴であった(梅田 2017: 56-64)。この楽器がインドネシアにも輸出され、今のブンティンへと変容したのである。確かにバリではカランガッサム県のアムラブラ周辺で盛んに演奏が行われていることから、地域の人々がそれを「カランガッサム特有なもの khas Karangasem」と評するのは間違いではない<sup>14</sup>。ただし実際には1930年にカランガッサム王家の宮廷にて演奏された記録があるといわれている程度であり<sup>15</sup>、その歴史は極めて浅い。

またこの記事では、ブンティンに青銅製ガムランの拍節楽器を加えたアンサンブル形態が「ガムラン・ブンティン」と表記され、バリの伝統楽器であり演奏形態であるガムランの一つに数えられてしまっている。

ところが2018年の新聞記事には、「伝統的楽器——オランダ植民地時代から続く古代カランガッサムの芸術」という見出しの記事が掲載される<sup>16</sup>。演奏が始まって100年経過していない外来の楽器は「伝統的楽器」になり、さらに古代 (ancient) という形容詞がつくことであたかも古から存在しているようなイメージが作り上げられてしまうのである。

またこの2、3年の間にカランガッサムのブンティンの演奏の映像は多数YouTubeに投稿されるようになったが、ムルドゥ・コマラに関する映像の一つには「カランガッサム特有のブンティンの古典的ガムラン Gamelan Klasik Penteng Khas Karangasem」というタイトルがつけられ<sup>17</sup>、このブンティンのガムランに「古典 klasik」という形容詞が付与されてしまっている。これ以外の投稿のタイトルを見ても「古典芸術 kesenian klasik」「バリで誕生した古典楽器 Alat Musik Tradisional Asli Bali」「カランガッサム特有の伝統的なガムラン Gamelan tradisional khas Karangasem」など「古典」や「伝統」を冠した表

現は枚挙にいとまがない。

またYouTubeに投稿されたカランガッサムの文化局職員グデ・アルナワ Gede Arnawaはそのインタビューの中で、ブンティンはカランガッサム王朝と中国の歴史的交流の中で伝播したと述べている<sup>18</sup>。このようにブンティンには新たな歴史性まで付与されてしまっているのである。

ムルドゥ・コマラのブンティンの復興はもはや一地域の楽器の復興にとどまらず、グループの10数年の活動の結果、この楽器とそのアンサンブルには、をカランガッサム特有で、伝統的かつ古典的な楽器というイメージが付与されてしまったのである。その結果、ブンティンは「創られた伝統」として地域の人々に認識されるようになったといえる。その証拠に、今では外国人などに向けて行われる演奏(写真5)では、100年近く前の演奏者の衣装を着て演奏するなど、その表層からも伝統性を強調するようになっている。

## 7. 新たな演奏曲目への挑戦

2019年末から世界的に流行した新型コロナウイルス感染症はバリにも大きな影響を与えた。観光業への影響だけでなく、諸儀礼の遂行についてもさまざまな制約が課され儀礼に付随する芸能の上演も中止に追い込まれた。ムルドゥ・コマラの活動も例外ではなく、2020年、2021年は練習も含めほとんど活動が行われなかった。しかしこの間、ムルドゥ・コマラの演奏者の一人、グン・クリシュナが、楽譜1に示した中高音域のみで構成されるアンサンブルの音の厚みを出すために、低音部の楽器の創作にとりかかる。いわゆるガムラン楽器における低音楽器<sup>19</sup>の代用ができるブンティンを創作したのである。一般的に使われているブンティンはギターのような1弦と3弦を使用するが、低音の楽器では4弦と6弦を使用した。日本でも大正琴がアンサンブル化した1970年代半以降に低音楽器の大正琴が誕生したが<sup>20</sup>、奇しくも同じ経緯を辿ることになった。

2022年に入り、新型コロナウイルス感染症の流行が落ち着いてきたタイミングで観光業が再開し、再び、バリの芸能も活動を再開する。ムルドゥ・コマラは2022年6月に練習を再開し、筆者が現地で調査を行った8月にはさまざまな儀礼やイベントに招聘され演奏を行っていた。8月の依頼演奏は5件、すなわち①独立記念日での国家と唱歌の演奏、②火葬儀礼前日の儀礼における演奏、③火葬儀礼後の浄化儀礼での演奏、④カランガッサム王宮一族の来賓のための演奏である。

中でも①は、国営企業<sup>21</sup>の共同体による独立記念日の儀式で、アムラブラの名所でかつての王宮の庭園で実施された。国家と唱歌の演奏は西洋音楽であり、グループにとって初めての挑戦だった。予定では次の3曲(国家《インドネシア・ラヤ Indonesia Raya》、唱歌《独立の歌 Kemerdekaan》、バリ語の唱歌《メラ・プティ(インドネシア国旗) Merah Putih》)で、さまざまな新しい取り組みに挑戦したが、前日になり演奏時間が10分に短縮されてしまったことから《メラ・プティ》の演奏のみになってしまった。しかし練習のプロセスにおいて新たな挑戦が行われている。

《インドネシア・ラヤ》と《独立の歌》は、どちらも全音階を使用する曲であり、はじめて全音階の曲に挑戦したことは注目すべき点である。ただし単にメロディーを演奏す

るにとどまらず、ハーモニーを加えたことはこれまでになかった工夫ある。和音を作るために、ムルドゥ・コマラは、和音を演奏するためのブンティンを新たに追加した。6本の弦の楽器を用いて、上下それぞれ2本の弦をギター第2弦、中央の2本をギター第4弦を用いて、ミ、#ソ、シ（イ長調の属和音）の調律にして音階ボタンで複数の和音を作り出す仕組みである<sup>22</sup>。不完全ではあるが、ボタンにより複数の和音を出すことが可能となった。またこの和音は《メラ・プティ》でも用いられた。この曲の音階は、インドネシア語ではなくバリ語の唱歌であることから5音スレンドロだが、グン・クレスナは、YouTubeにアップされているバリ人のポップグループ、スワンダナ・バンド Swandana Bandの演奏のクロンチョン kloncong風の編曲<sup>23</sup>を参考にし、その中に使われているクロンチョン独特のギターであるチャック Cakの和音と独特なリズムを和音楽器のブンティンで演奏した<sup>24</sup>。

《インドネシア・ラヤ》と《独立の歌》の2曲は、実際の儀式の中で演奏はできなかったが、筆者が録画した《インドネシア・ラヤ》はまだ問題が多く、その問題点は不安定な音程である。なぜなら、ブンティンはバリの伝統音楽を演奏するために調弦されて音階ボタンが付けられていることから、洋楽器の全音階を演奏する際にはその音程は、西洋音楽に近い音程というだけで、半音は100セントになっていないからである。

本稿では詳細には述べないが、タバナン県ブブアン村の大正琴を起源とする楽器のアンサンブルグループ（サンガル・ブンシル・ガディン）Sanggar Seni Bungsil Gadingは、基本的に西洋音楽に用いている全音階に楽器（マンドリン）を調律し、ギターやベース、ドラムなどとともにポップミュージックに近い作品を多数発表している（梅田 2019：165-70）。ただしその変容により、バリの伝統的な音階や旋法を用いた楽曲はほとんど演奏されなくなってしまった。このことは、日本の大正琴同様に調律を全音階に変更することで、伝統音楽の喪失を招く可能性があることを示唆している。

## おわりに

本論ではバリ島東部カラングッサム県の県庁所在地アムラブラ周辺で演奏されている楽器ブンティンと、そのアンサンブルのグループ「ムルドゥ・コマラ」の活動に焦点を当て、ブンティンのカラングッサム県における位置づけを明らかにするとともに、日本の大正琴へ回帰しつつある現状について報告してきた。

ブンティンのカラングッサム県の伝播については実証的な資料がなく、口承によって推測するしかないが、1930年には宮廷において演奏されたという。その後、1960年代前後にはアンサンブル化するが、さまざまな政治状況によって活動が継続できずに一端は途絶えてしまった。1980年代には幾度か複数のグループが復興を試みたが、継続はしなかった。その後、2007年に結成されたブンティンのアンサンブルグループ「ムルドゥ・コマラ」は、楽器や音楽の復興、さらには楽器の改良などを積極的に行い、今ではブンティンを組織的に伝承する唯一のグループとなっている。

このグループはさまざまな宗教儀礼や公的な儀式などに参加し、伝統的なガムラン音楽の音階、旋法の作品を演奏してきた。ガムラン音楽の作品としてすでに知られた楽曲だけでなく、自ら多くの作品を創作しレパートリーとしている。しかし、バリの伝統的な音階を演奏するための楽器であり、2022年までは大正琴のように全音階を演奏する楽器として使われることはなく、楽器もそのように変容していった。

このムルドゥ・コマラの活動を契機に、県庁所在地アムラブラで細々と演奏されていたブンティンとその楽曲は徐々にメディアなどを通して紹介され知名度を上げていく。その結果、徐々にこの楽器やアンサンブルについて「伝統」「古典」「古代」などという歴史性が付与して語りだされたのである。その結果、日本から伝承されバリで変容した楽器は、今では「伝統楽器」となり、そのアンサンブルは「古典的、伝統的なガムラン・ブンティン」とよばれるようになっていった。その出自が不明瞭であるからこそ、その捏造が比較的簡単に行われたともいえる。E. ホブズボウムが「伝統というものは常に歴史的につじつまのある過去と連続性を築こうとするもの（ホブズボウム 1992：19）」と説明した「創られた伝統」がここに完成したのである。

しかし、このバリの音楽を演奏する伝統的な楽器とアンサンブルは「伝統」の枠を超え、コロナウィルス感染症が落ち着きを見せ始めた2022年以降、依頼によって国歌《インドネシア・ラヤ》などの洋楽に基づいた全音階の楽曲の演奏を試みるのである。和音楽器、低音楽器追加するなどさまざまな試みを実施し、未完成ながら新しいジャンルの音楽に挑戦を始めた。

もともと洋音階の全音階の音階ボタンを持っていた大正琴がバリで受容された結果、カラングッサムではその音階を放棄して、自文化の音楽の音階や旋法を演奏するための楽器へと変容をとげた。しかし今、再びブンティンで洋楽を演奏するため、ムルドゥ・コマラの人々はその新たな挑戦を始めたともいえる。この現象はバリのさまざまな楽曲を簡易に演奏できる「伝統楽器」となったブンティンが、伝播当初の大正琴への回帰をしているといえないだろうか？

今の楽器の音律にはイ長調に近い全音階を演奏することのできる音階ボタンはあるが、その音程は西洋音楽とは微妙に異なる。このまま演奏したとしても不完全な全音階の楽曲しか演奏できないことは言うまでもない。今後、ムルドゥ・コマラの人々が、楽器の音律を変えて西洋音楽が演奏できるブンティンを新たに誕生させるのか、つまり大正琴の姿にブンティンを戻すのか、それとも西洋音楽が演奏できる可能性を知りつつも、伝統的な音階や旋法を演奏する楽器として演奏を続けるのか？その結果が出るには、まだしばらく彼らの活動を見守る必要があるだろう。まさに現在はその過渡期なのである。





写真2 独立記念日の儀式での演奏準備の様  
インドネシア国旗（赤・白）をイメージした舞台  
と衣装である。



写真3 火葬儀礼前日での演奏  
衣装は黒で統一されている。



写真4 死者の魂の浄化儀礼での演奏  
同じ死者と関わる儀礼でも浄化儀礼の場合、  
演奏者は白い服を着る。



写真5 外国人の来賓（グループ）のために模様  
された昼食会での演奏  
伝統性を強調するために、100年近く前の  
上半身は服を着用しない演奏衣装を着用。

#### 付記

本稿は科学研究費「インドネシアにおける大正琴の受容  
にと変容に関する民族音楽学的研究」（研究代表者：梅田英  
春 基盤研究（C）2018年～2022年）による調査、研究  
の一部である

#### 参考文献

- Antara, Km. Pasek. 1987. Kesenian "Penting" yang Langka di  
Karangasem, *Bali Post*, (16, August).
- Antara, Komang Pasek. 2010. Seni Gamelan "Penting Khas  
Karangasem: Nyaris Penuh Kini Bangkit Kembali, *Bali Aga*,  
Edisi 05 (Agustus s/d 11 Agustus), p. 5.
- ホブズボウム, エリック 1992 「1. 序論——伝統は創りだされる」エ  
リック・ホブズボウム・テレンス・レンジャー編『創られた伝統』前川  
啓治・梶原景昭 他訳 [Eric Hobsbawm and Terence Ranger (eds.),  
*The Invention of Tradition*, Cambridge: The Cambridge University,  
1983].
- 金子敦子 1995 『大正琴の世界』大正琴協会・音楽之友社。
- 梅田英春 2011 「バリにもたらされた大正琴——カランガスム県アマ  
ラ周辺部のブンティン——」『ムーサ』（沖縄県立芸術大学音楽学研究誌）  
12: 53-64。
- 2017 「戦前の日本における大正琴の輸出とそのインドネシア  
への伝播」『静岡文化芸術大学研究紀要』17: 57-64。
- 2019 「バリ島西部プブアン村に伝承される大正琴を起源とす  
る楽器マンドリン」『静岡文化芸術大学研究紀要』19: 165-70。

#### 新聞記事（署名なし）

- "Skehe Merdu komala, Berharap Jadi Makot Karangasem" *Bali  
Post* (17, Jan. 2017).
- "Traditional Musical instrument, Ancient Art of Krangasem from  
Dutch Colonial Period", *International Bali Post* (12, Dec. 2018).

#### 参照URL

- Alat Musik Penting  
<https://www.youtube.com/watch?v=70Q-soy8PLI> （2022年11  
月5日閲覧）
- [Instrumen Musik] Penting  
[https://museummusikindonesia.id/id/2021/03/22/instrumen-  
musik-penting/](https://museummusikindonesia.id/id/2021/03/22/instrumen-musik-penting/) （2022年11月5日閲覧）

Merah Putih - Swandana Band ft Putu MaskotCs Cover Genjek!!!  
<https://www.youtube.com/watch?v=eyXi78iSV-E> (2022年11月6日閲覧)

## 註

- <sup>1</sup> 筆者は2010年8月からこのグループの調査を始め現在に至っている。
- <sup>2</sup> バリ島中部の街。現在ではスマラプラとよばれる。クルンクン県の県庁所在地。
- <sup>3</sup> <https://www.youtube.com/watch?v=70Q-soy8PLI> (2022年11月5日閲覧)  
この映像は2017年に製作され、2020年にyoutubeにて公開された。この中に収録されているチプタ・スダヤ・アムラブラ Cipta Sedaya Amlapuraというブンティンの演奏グループのメンバーがインタビューに対応している。なお、現在このグループは活動を休止している。
- <sup>4</sup> 経験豊富なメンバーの逝去により活動ができなくなったことについては以下に記載がある。  
インドネシアの楽器事典「ブンティン」の頁(本文はインドネシア語)  
<https://museummusikindonesia.id/id/2021/03/22/instrumen-musik-penting/>  
(2020年11月5日閲覧)
- <sup>5</sup> <https://www.youtube.com/watch?v=70Q-soy8PLI>  
(2022年10月15日閲覧)
- <sup>6</sup> 「伝統的なバリへの回帰」を意味するスローガン。中央集権的な政治体制から地方分権へと移行した2000年前後に数年間わたりバリ全土で用いられたスローガン。地方紙であるバリ・ポストの記事の中から誕生したと言われるが、その後、政治・経済・文化などのさまざまな文脈で用いられた。
- <sup>7</sup> 2016年1月18日付のバリ・ポストにはSkehe Merdu komala, Berharap jadi Makot Karangasem (演奏グループムルドゥ・コマラはカランガスム県のマスコットの的存在になることを望んでいる) という記事が掲載されその中にウィダナの次のようなコメントが掲載されている。  
「グループ設立直後は、各村や寺院、結婚式やホテルやレストランのイベントまで、演奏依頼があれば無料で演奏した」  
このようにグループ設立直後は出演することでグループやその音楽を認知してもらう活動を積極的に展開していたことがわかる。
- <sup>8</sup> 2018年12月12日付のバリ・ポスト(国際版)5頁Penting掲載の記事、Traditional Musical instrument, Ancient Art of Krangasem from Dutch Colonial Period. に記載。  
5つの儀礼とは、デワ・ヤドニャ dewa yadnya (寺院の周年祭などの諸儀礼)、マヌサ・ヤドニャ manusa yadnya (死を除く人生儀礼)、ピトラ・ヤドニャ pitra yadnya(死と関係のある人生儀礼)、ブタ・ヤドニャ buta yadnya (悪霊払いの儀礼)、ルシ・ヤドニャ resi yadnya (僧侶の就任儀礼)である。これらの儀礼のいくつかには異なる音階を持つ固有のガムラン音楽の編成が用いられるが、スタナは、ブンティンは楽器を持ち替えることなく、ブンティンはすべての儀礼において演奏できる、ことを「5つの音」という表現で説明したと考えられる。
- <sup>9</sup> 2018年12月12日付のバリ・ポスト(国際版)5頁Penting掲載の記事、Traditional Musical instrument, Ancient Art of Krangasem from Dutch Colonial Period. に記載。
- <sup>10</sup> セントは音程を測定するための対数単位であり、12平均律はオクターヴをそれぞれ100セントの12の半音に分割する。
- <sup>11</sup> ペログ音階は7音音階から5つの音で構成される複数の旋法によって構成されている。最もポピュラーなものが、ゴング・クビャルgong kebyarに用いられるスリシル旋法であり、ブンティンで演奏されるトゥンブンの他、スナレンsunaren、パロbaroなどの旋法ある。ブンティンでは使用されていない。
- <sup>12</sup> ジェゴクjegog音階(バリ島西部の竹製のガムラン)の4音音階は、下から開放弦ミ、#ソ、シ、レである。
- <sup>13</sup> ムルドゥ・コマラの演奏する器楽曲のうち《タブ・パドゥマラ Tabuh Pademara》は、「さまざまなものを混ぜあわせた (pademala) 曲 (Tabuh)」という意味で、この曲はスレンドロ、ペログなどさまざまな音階、旋法で演奏される。楽器の特徴を生かしたユニークな曲といえる。
- <sup>14</sup> 実際にはカランガスム県以外にもタバナン県のプジュンガン村、プブアン村でこの楽器は伝承されているが、楽器の名称はマノリンmanolin、マンドリンmandolinとよばれその演奏方法や楽器の形態にはブンティンとの違いがある。
- <sup>15</sup> 1930年の説については実証できる資料がなく、口承されているのみである。

- <sup>16</sup> 2018年12月12日付のバリ・ポスト(国際版)5頁Penting掲載の記事。原題は Traditional Musical instrument, Ancient Art of Krangasem from Dutch Colonial Period.
- <sup>17</sup> <https://www.youtube.com/watch?v=xmwxMurSUNU>  
(2022年11月5日閲覧)
- <sup>18</sup> Seni Musik tradisional Penting <https://www.youtube.com/watch?v=VCijFoEcZcQ> (2002年11月5日閲覧)。
- <sup>19</sup> ジェゴガンjegogan, ジュブラグjublagなどの楽器のことをいう。
- <sup>20</sup> 日本で複数音域の大正琴が開発されたのは1970年代後半である。大正琴の諸流派の中でも琴伝流は、大正琴のみのアンサンブルを組むことから、アルト、テナー、ベースといった複数の音階の大正琴が誕生した(金子 1995: 83)
- <sup>21</sup> BUMN (Badan Usaha Milik Negara)
- <sup>22</sup> 上の弦から、ミ、シ、ミ、#ソ、シ、ミ
- <sup>23</sup> <https://www.youtube.com/watch?v=eyXi78iSV-E>  
(2022年11月6日閲覧)  
クロンチョンはインドネシアのポピュラー音楽のジャンルの一つで、ポルトガル植民地時代のギター類や西洋楽器を使うことで知られている。このYouTubeバージョンは、クロンチョン風に編曲されているだけでなくカランガスム地域の芸能ゲンジェツ genjekも取り入れていることから、ムルドゥ・コマラも曲の途中でゲンジェツを上演した。
- <sup>24</sup> ムルドゥ・コマラではチャッの形態がハワイで誕生した弦楽器ウクレレに類似していることから、このパートを「ウクレレ」と呼んでいる。

